

軌跡

三百年以上の歴史を誇る
津屋崎祇園山笠

津屋崎祇園山笠は、1714年から続く祇園山笠の一つで、福岡市の櫛田神社から津屋崎の波折神社へ祇園社を勧請したことを起源とし、三百年以上の歴史を誇ります。山笠が道を駆け巡ることは、そこに住む人々をお祓いすることと同義とされ、それによって無病息災・悪疫退散を祈願しています。

明治時代の山笠は全高10m以上あったといわれていて、1916年に電線が張り巡らされたことから山笠は5mほどの高さとなり、現在もその高さで続いています。

昭和に入り、戦争の影響で山笠を思うように実施できない時期がありました。それでも、子ども山笠のみを実施するなど、可能な形で行事を継続しようと努力してきました。

家が一軒建つほどの出費をすることもあったそうですが、実施することの喜びや名誉、地域の義務感が負担感を上回り、中断や中止には至らなかったといわれています。

一時中断も時を経て復活
伝統を守り続けるためには

1963年ごろに一旦中断されますが、再開を望む声は少なくありませんでした。その後、1975年に現在の山笠が復活し、2024年に復活50周年を迎えました。50年という年月で、社会環境や人々の暮らしは常に変化し、十数年前と比べると参加者は減少傾向にあります。昇き手の顔ぶれが大きく変わらない一方で、運営側は刷新されることなく年齢を重ねてきました。

山笠の伝統はしっかりと形になり、次の世代へ確実に継承できる状況にあるのか、また、山笠が地域でどのような役割を果たしているのか。新たな時代に適応しつつ、この伝統を守り続けるための取り組みが求められています。



特集 津屋崎祇園山笠 —山よ動け—

**津屋崎祇園山笠
三百年の歩み**

1714年(江戸時代中期) 博多の櫛田神社から波折神社に祇園の神様を迎え、三本の山笠が建つ

明治時代 高さ10m以上の山笠がまを駆け巡る

1916年(大正5年) 電線が張り巡らされ高さ5mほどに縮小。戦時中も山笠は継続

1963年(昭和38年) 給与所得者が増えて昇き手不足になり、この年を最後に一時中断

1975年(昭和50年) 祇園山笠が復活

2014年(平成26年) 発足三百年を迎える

2024年(令和6年) 復活50周年を迎える



▲平成期に入ると、どの時代よりも安定性が重視され、山笠が三角形の姿に



▲昭和期に入ると、一つの飾りは小さくなりますが、繊細さが増し、きめ細やかな装飾に



▲縮小されるも、装飾は明治期を踏襲。飾りが大きく、山笠の台よりも外側へはみ出すほど



▲家屋の屋根が低かったため、数km離れた地域からも山笠が動いているのが見えたとのこと

百年後の未来に
私たちは
何が残せるだろうか。
発足三百年を越え
先祖代々、脈々と
受け継がれてきた山笠。
まちに電線が張れば
山笠を低くし
昇き手が不足すれば
日程を変えた。
一時中断したものの
幾度となく訪れた
存続の危機を乗り越え
紡がれてきた想いは
今も宿り続けている。



地域をつくる山笠。

人がつながる

夏の訪れを告げるかのごとく準備が始まる。ここで人がつながり、まちが結束する。



①昨年使用した草鞋を使って「棒洗い」②③ワラをよって草鞋と昇き縄作り④土台と棒を締め上げる「棒締め」⑤「ボテ」という山笠の台飾りを作る人々⑥倉庫に入れておいた山笠を洗う「台おろし」⑦棒締めの際の緩衝材となる御簾竹づくり⑧棒を清めるお汐井振り

山笠が昇かれるまで

津屋崎祇園山笠の追い山は、毎年、7月19日に一番近い日曜日と決まっています。本格的な準備は7月になってからですが、津屋崎祇園山笠振興会(以下、振興会)を中心に、山笠を安全な環境で行うことができますよう、救命講習の実施や保険の整備などの事前準備を進めています。6月下旬になると、各流はそれぞれ準備を始めます。倉庫に入った棒を前年の山笠に使った草鞋で洗ったり、山笠の飾りを作ったり、山小屋を建設したり…。土台と棒を縄で締めていく「棒締め」のとき

には「ウントコネ、ウントコネ、ウントコネ」の掛け声に合わせて、大勢の人が力を合わせて決して外れることがないように縄を締めていきます。

関係性が蓄積し 大きな輪となる

およそ1カ月間、地域の人々が協力して準備を進めていきますが、生業を抱えながら、仕事の合間を縫って参加する人がほとんどです。土木業者や銀行員、教師など、さまざまな職業を生業とする人が集まって山笠を準備し、動かしているのです。

その過程で蓄積されていく人と人との関係性。一緒に山笠を組み上げたり、作業したりすることを通して気の合う仲間ができること、いざというときに助け合える人が増えること。山笠の昇き手だけではありません。昇き手を支える人、家族、友人、追い山当日に見物に来る人も「津屋崎祇園山笠」に関わる人の一人です。そんな山笠でのつながりが大きな輪となって、まちをつくっているのです。

山笠Q&A

山笠ってどのくらい重い？

山笠の重量は1トンを超え、博多の山笠をしのぐ重さではないかといわれています。

棒の長さが違う？

博多では6本の棒が同じ長さ。津屋崎では、道が狭く曲がり角が多いため、小回りが利くように真ん中2本の棒が一番長く、外側に行くにつれて短くなっています。

昇き手はみんな津屋崎に住んでいる人？

各流には、明治時代から周辺地域の協力・加勢があり、現在も市内外からも加勢があります。津屋崎祇園山笠が三百年以上続いてきた原動力の一つとなっています。



Q・津屋崎祇園山笠の魅力とは？



山笠を昇く男はとてもカッコ良く、一人一人が魅力的だと思います。また、山笠の一番の魅力は「人と人につながること」だと思います。「仲間に加わる」という垣根を低くして、もっとたくさんの人とつながりたいですね。

Q・津屋崎祇園山笠に参加したきっかけは？



津屋崎に移り住んですぐ、区内に住む山笠の関係者から声を掛けられて参加しました。14、15年たち、新町の人以上で初めて若頭筆頭になりましたが、それも人が減っている証拠。福津の中で山笠が「推し活」されないといけませんね。

Q・まちにとって津屋崎祇園山笠とは？



隆盛期に比べて店は減り、人も高齢化していますが、山笠は、まちの活性化に欠かせません。現在も縦社会が色濃く残るなど「変わらない」ことも大切ですが、時代に合わせて臨機応変に変わっていくことも大切ではないでしょうか。

まちの人

山笠で育てる。

人生を豊かにする

なぜ津屋崎祇園山笠は三百年も続いてきたのか。そんな教科書には載っていないことを伝え続けて十数年。振興会会長の花田実さんにその想いを聞きました。



津屋崎祇園山笠振興会 第十代会長

Hanada Minoru
花田実

40年ぶりに子ども山笠復活

山笠を教育の一つに

津屋崎祇園山笠発足三百周年および復活40周年を機に、2014年から津屋崎小学校と津屋崎中学校で山笠の授業が行われています。

「いつか子どもたちが昇き手になってくれたら…」と山笠の後継者育成のために授業をしていると捉えられがちですが、振興会会長の花田実さんは「子どもたちに後継者になってほしいから授業をして、地元に残ってもらおうなんて考えはもってのほか。そんな授業には魅力のかけらもない。これまで三百年以上続いてきたのには理由があって、それを観察してもらおうことを大事にしている」と言います。

山笠の授業開始から2年後、学校の先生から「本物の山笠が作りたい」という要望が上がりましたが、急な話に振興会本部は慎重な姿勢。そのような中「今復活させなければ」と立ち上がったのは当時のPTAで役員を担っていた山笠の若手でした。地域に協力を仰いで寄付金を集めて2基の子ども山笠を製作し、およそ40年ぶりに子ども山笠が復活。授業でも山笠を昇くことが盛り込まれ、地域の祭りでも披露されました。2019年には、子ども山笠復活当時、小学3年生だった子どもたちが「子ども山笠実行委員会」を結成し、4月の祭りに向けて動き始めました。各学年



①②③地域の大人たちが子ども山笠を製作し昇き方を指導④⑤津屋崎祇園山笠振興会が小学生に山笠の授業⑥⑦飾りの製作や本番に向けて計画を立てる小学生⑧波折神社にお参り⑨くじ引きをする海流と空流の代表⑩⑪⑫津屋崎千軒で山笠を昇く海流と空流



2019年当時
子ども山笠副実行委員長
空流代表 西野 龍太郎さん

子ども山笠に関われて良かった

小学3年生のときに子ども山笠が復活することになり、授業でどんな飾りにしたいか話し合ったり、飾り作りをしたりして、一人一人の似顔絵を描いて飾りました。披露する当日に骨折してしまいましたが、台上がりをしたのを覚えています。担任の先生や校長先生、周りの大人たちの熱意があったからこそ形になったものだと思います。

6年生のときにも、地域の祭りで子ども山笠を披露することになり、実行委員として波折神社の宮司さんにお祓いをお願いに行ったり、小学校の図書館で会議をしたりしていました。祭りで昇き終わった後はすごく達成感があり、やって良かったなと思いました。

昨年、6年ぶりに裸参りと追いの山に参加しました。初めて大人の山笠を体験して、楽しかったのはもちろんですが、子ども扱いをされず大人の一員になったんだという実感がありました。また来年も再来年も参加したいと思っています。

への説明や朝のあいさつ運動などで参加者を集め、祭り当日には70人が参加。「海流」「空流」の2つの流が、大人の山笠同様にまちを駆け巡り、力をふり絞る子どもたちを大人は笑顔で温かく見守っていました。

切にしていること、物事を大切にする方法を感じ取ってほしい。山笠の本当の意義や意味をきちんと伝え、その上で、一学年に一人でも二人でも山笠に出てくれれば、こんなうれしいことはない。押し付けはしないが、私たちは山笠を続けるべきだと思っっているし、山笠にはそれだけの価値があるから」と言います。

祭りでの披露はコロナ禍を経てなくなりましたが、山笠の授業は途絶えず、地域の人々の協力もあって、2024年には150人ももの小学生が山笠に参加しました。花田さんは「私たちは、将来、子どもたちが山笠の担い手になることを押し付けてはいけません。ただ、山笠に参加し私たちがと接することで、地域が大

いずれ津屋崎を離れていく子どもたちが、移り住んだどこかで、そこで大切にされていることを感じ取って大切にしたり、人との関わりを大切にしている力をも身につけていたりしていれば、子どもたちの人生はきっと豊かになる。その想いは、いつか子どもたちの中で芽吹き、花開く日が来るのではないのでしょうか。

津屋崎人形と山笠立。

Tsuyazaki ningyo

ともに伝統をつなぐ

単なる工芸品ではなく、津屋崎祇園山笠を象徴するもの。それが津屋崎人形。「絶対に欠かせない」その重責を担い、歴史を紡いでいく人形師は何を思うのか。筑前津屋崎人形巧房の八代目 原田翔平さんに話を聞きました。



Harada Shohei
原田翔平

山笠仕様の「ごん太」を作る原田翔平さん。当初、家業を継ぐことは考えていなかったため、大学を卒業した後は公務員として働いていました。津屋崎人形が多くの人に愛され、今まで残ってきたことを知って正式に弟子入り。津屋崎人形を受け継ぎ、次代に残すために、日々の人形作りに励んでいます。



津屋崎人形

江戸時代後期から作られている素焼きの土人形。粘土を2つ1組の型に指で押しつけて詰める「手押し製法」で作られ、温もりを感じる穏やかな形状と鮮やかな色遣いが特徴。節句人形や干支の人形など1,500以上の種類があり、中でもおしゃぶり人形として作られた「ごん太」とフクロウを模した「モマ笛」が人気。

2人の人形師が手作業で三流の飾りを製作

山笠といえば、豪華絢爛な飾り。その津屋崎祇園山笠の飾りの製作は全て津屋崎人形の人形師が担っています。以前は複数の人形師がいましたが、現在は筑前津屋崎人形巧房七代目の原田誠さん・八代目の翔平さんの手で、三流の飾りが作られています。

博多祇園山笠と異なり、津屋崎祇園山笠では「飾り山」が「昇き山」を兼ねています。また、人形は毎年使い切るのでなく、衝撃による損傷や雨・水などで劣化した人形を毎年修復して使い、古い山が終われば倉庫で保管しています。人形だけでなく、山笠を構成するさまざまなパーツは一つ一つ人形師による手作業で、毎年準備しています。

生業を止めて山笠を作る

獣や武者人形など数十体が筑前津屋崎人形巧房の築百年

を超える倉庫に保管されていますが、建物の老朽化や置き場所不足といった問題が山積。

さらには「山笠の飾りは一つ一つが大きいので広い作業スペースが必要。そのため、山笠の時期になると土人形の道具を全部片付けなければならず、2カ月くらい土人形の仕事はできなくなる」と翔平さんは言います。生業を止めるため、当然、収入がなくなります。翔平さんが幼いころから、夏は家の中にピリピリした空気が漂っていました。職人性もあつてか飾り付け費用の催促はしていませんでした。

人形師が感じる重圧と責任

250年もの間、津屋崎人形を作り続けてきた原田家が大切にしてきたものを受け継ぎ、守らなければならない重圧



と責任を感じている翔平さん。「普段作っている土人形とは全然違い、山笠の飾りを作ることにプレッシャーを感じている。また、家族が山笠の飾りを作り続けてきて、この工房

報を聞いて作ったほうがよいのかも答えが出ていない」。津屋崎人形師が父の誠さんと自分しかいない現状に、新しいものを取り入れるかどうか悩み、試行錯誤していると翔平さんは言います。

細部に宿る人形師の魂

「土人形は買いたい人、気に入った人が買ってくれるもの。でも山笠は提供されるもので、父は飾りが少し汚れているだけでも「駄目だ」と言う。ほんの少し汚れた飾りを外して作り直し、妥協を許さないから「すごく時間がかかる」。翔平さんは、少し苦笑いをしながらも父の行動を理解しています。商品ではないけれど譲れないこだわりがある。その細部に宿る人形師の魂が人を惹きつけ、山笠が三百年以上続く原動力となっているのではないのでしょうか。

津屋崎人形が愛される理由に

皆さんは「雛人形を買おう」となったとき、どのように選びますか。百年前であれば、地元の人たちは津屋崎人形を買うことが多かったそうです。しかし時代は変わり、どの雛人形でもウェブで簡単に買えるようになりました。「自分の好きなものを自由に選べる時代になり、地元の人に津屋崎人形が愛される理由がなくなってきた。そんな中、山笠は今も変わらずに津屋崎人形が飾られ、山笠に関わる人が、津屋崎人形に愛着を持つ機会になっている。津屋崎人形が地元の人に愛されるには山笠が必要不可欠。ともに「津屋崎」の名がつく山笠と人形は、互いに欠かすことのできない存在。そう語る翔平さんは、250年の歴史ある伝統工芸の担い手としての重圧と責任を背負い、常に未来を見据えながら試行錯誤を続けています。

津屋崎人形が人々に愛されるには山笠が必要不可欠



三百年続く津屋崎祇園山笠。
その灯を次世代へ伝えるべく
守り続ける人たちがいる。
津屋崎だけではない福津の山笠へ。
時代が変わっても変わらないものが
このまちにはある。
地域コミュニティが希薄化する現代で
一つの伝統行事が育む人のつながりは
何物にも代えられない。
見物に来てほしい、参加してほしい。
ともに福津の山笠を伝承していきたい――。



角 信喜
Kado Nobuki

事務局長を務め、山笠の問題解決に熱心に取り組む熱血漢。

Chapter 5



山よ動け。

Connecting Yamakasa to the future

津屋崎祇園山笠振興会事務局長に聞く
「山笠を未来につなぐために…」

山笠が持つ本当の価値を伝え続けていく

直面している存続の危機

今回「広報ふくつ」で津屋崎祇園山笠を取り上げるに当たり、本来、振興会会長が話すべき場ですが、この10年ほど、一年を通じて山笠の運営に時間を割いてきた事務局長の私が筆を執らせていただきました。

何を書くべきか非常に迷いました。ありふれた山笠への賛辞を並べても実感が伴いませんし、単なる昇き手募集の文章にするのも本意ではありません。考え抜いた結果、山笠を未来へつなぐためには、まず私たち担い手自身が現状を直視し、一歩踏み出さなければならぬという決意を書くことにしました。

市民の皆さんの中には、山笠を「自分には関係のない行事」と感じる人もいるかもしれません。しかし、ここで語る「地域の連帯」の問題は、数十年後に誰もが直面するコミュニティの崩壊や、孤独といった課題に直結しています。どうか最後までご一読いただけると幸いです。

誇りを持って「価値」を伝える

では、維持していくために私たちはどうすればよいのでしょうか。その答えは、奇策ではなく「正攻法」しかありません。山笠が持つ本当の価値を、自分たちが自身の言葉でしっかりと表現す

さて、率直に申し上げます。このままでは津屋崎祇園山笠は近い将来なくなってしまう。

現在、追い山当日の昇き手こそ極端には減っていませんが、全体的な高齢化は止まりません。さらに深刻なのは、運営を担う層が後継者不足で20年近く固定化されている「組織の硬直化」です。山笠を復活させ、その「形」を整えることに精一杯で、社会の変化に合わせた施策が後手に回ってしまいました。これは津屋崎だけの問題ではなく、日本中の伝統行事が抱える共通の悲鳴でもあります。

「当たり前」だったつながりの喪失

誰かのせいにするのではなく、私たちは今、厳しい現実を見つめなければなりません。かつて山笠を支えていたのは、住民のほとんどが顔見知りであるという強固な「地域性」でした。しかし、ライフスタイルの変化と共に地縁は薄れ、今後も衰退していくというのが冷静な予測です。

私たちが当たり前と感じている、流の中の連帯感や、祭り当日だけではない日常のつながり。この「近すぎず遠すぎない、絶妙な距離感」での人間関係は、他には代えられない地域の財産です。山笠をレクリエーション(遊び)ではなく「自分の周りの環境

これまでは参加者の多くが津屋崎地区の住民でしたが、今後、地元からの担い手が急激に増えることは期待できません。たとえ祭りに参加したとしても、2カ月にわたる準備や運営といった「裏方の苦勞」まで共にしてくれる人を増やすには、非常に高いハードルがあります。

さらに、現代の山笠にとって最大の脅威は、競合相手が娯楽になったことです。「山笠に行くか子どもと水族館へ行くか」。この天秤にかけられたとき、重労働を伴う伝統行事が、手軽なレジャーに勝つのは至難の業です。こうして書き連ねてみると、山笠を再び盛り上げることは、不可能にさえ思えてきます。

山笠は先人が遺した「最高の仕組み」

しかし、絶望してばかりはいられません。山笠とは、単なる



古い祭りではなく、先人が遺してくれた極めて高度な「集いの発明」だからです。

一つの「流」に150人から200人もの大人が集まり、2カ月前から準備を共にし、重い山を昇き、泥臭い試行錯誤を共有する。これほど多くの「主体者」が、体を使って一つの体験を共有する仕組みを、現代においてゼロから作り直すことは、まず不可能です。

今の地域自治で起きている悲劇は、世代や背景が異なる者同士が、共通言語を持たずにゼロから話し合い、多大なコストをかけて相互理解を模索しなければならぬ点にあります。この構造的な難しさは、個人の善意や努力だけで支えきれぬものはありません。だからこそ、私たちは「面倒くさい」ことを承知の上で、意図してこの「集まる場」を維持し、次世代に手渡していく必要があるのです。

必死になって汗を流す意味はありません。地域の未来のため、そして何より子どもたちが健やかに育つ環境のために。私たちは今一度、この重い山を動かすために一歩踏み出さなければなりません。